

# MATAGI プロジェクト 2019 年アンケート調査集計結果

2019 年 9 月 18 日

MATAGI プロジェクト実行委員会（事務局：地球・人間環境フォーラム）

## 1. 概要

### （1）目的

地域の資源である野生獣皮の有効活用の促進には、野生獣皮の安定的な需要と供給の体制の構築が求められる。そこで、獣皮活用の市場形成に向け産地と使い手双方のニーズを把握し、課題等を整理することを目的に調査を実施した。

### （2）実施期間：

2019 年 7 月（発送 7 月 3 日、回答締切 7 月 23 日）

### （3）調査対象：

MATAGI プロジェクトに参加している産地や作り手 314 件

### （4）調査方法：

郵送配布、郵送・FAX・ウェブ回答。「産地」「使い手」の 2 種類のアンケート調査票を各自が自由に選べるような形で実施。

### （5）回収状況：

「産地」アンケートについて、有効回答数は 46 件（回答率 14.6%）。「使い手」アンケートについては、有効回答数は 9 件。

※本アンケートはトヨタ環境活動助成プログラムの助成を受けて実施しています。

<お問い合わせ先>

MATAGI プロジェクト実行委員会事務局／地球・人間環境フォーラム（担当：平野、坂本）

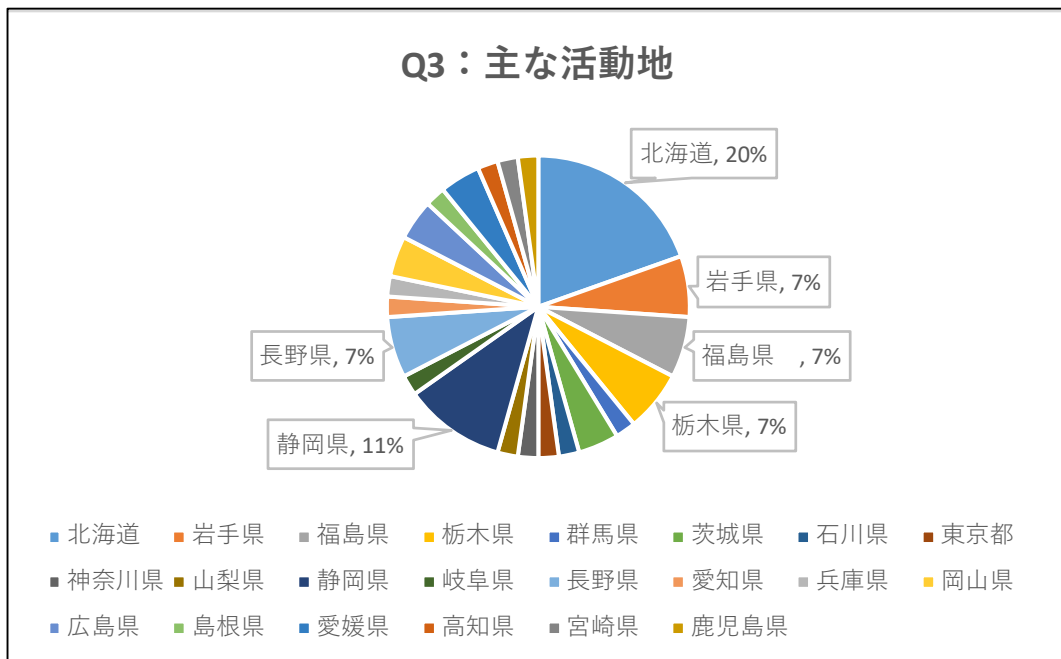
〒111-0051 東京都台東区蔵前 3-17-3-8F

TEL：03-5825-9735／FAX：03-5825-9737／Eメール：sakamoto@gef.or.jp

## 2. 集計結果：産地アンケート

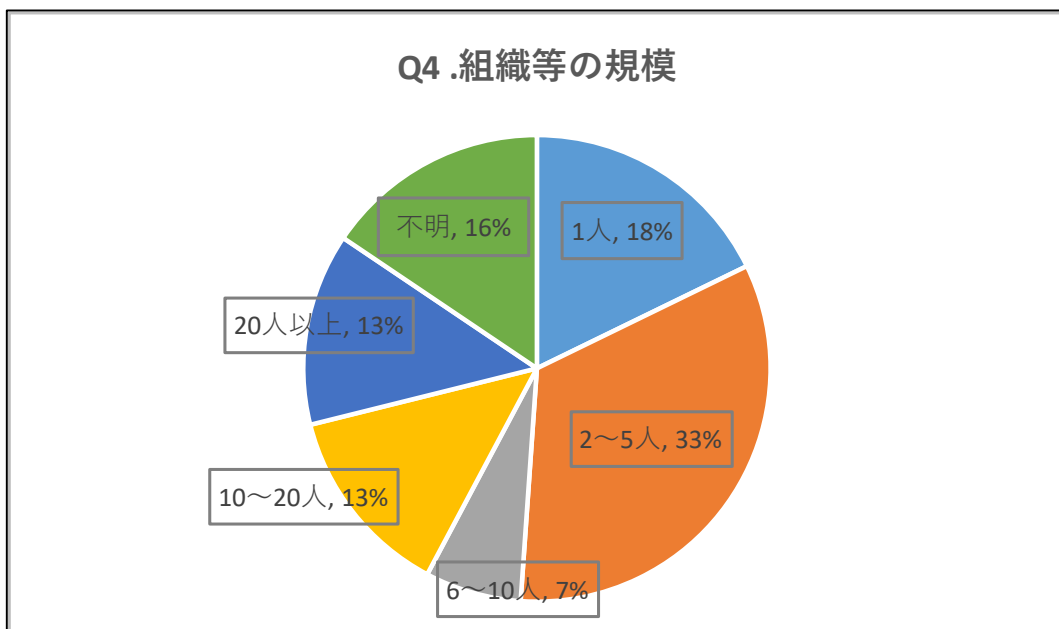
### (1) 活動地 (Q3、n=46)

回答組織の活動地は全国各地にわたっているが、最も多いのは北海道であった。



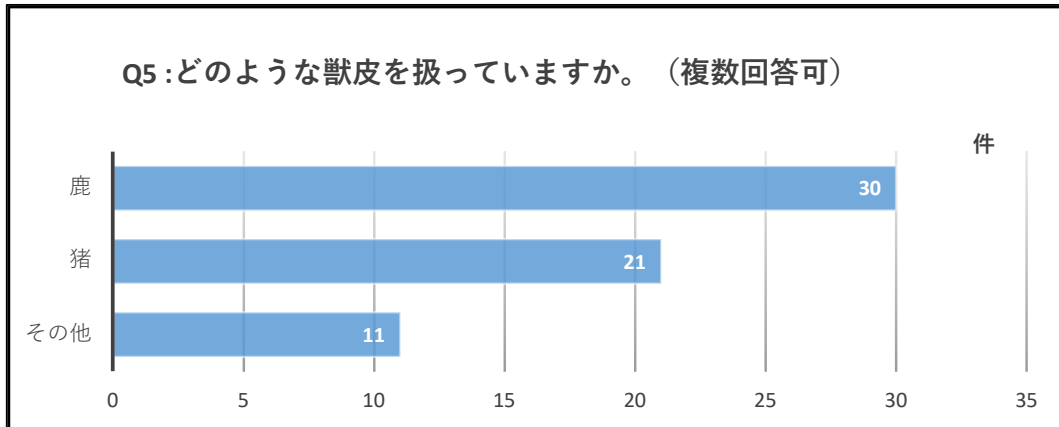
### (2) 組織の規模 (Q4、n=46)

回答した組織の規模は小規模である場合が多く、「1人」と「2～5人」を合わせて 51%であった。



(3) 獣皮の種類 (Q5、n=46、複数回答)

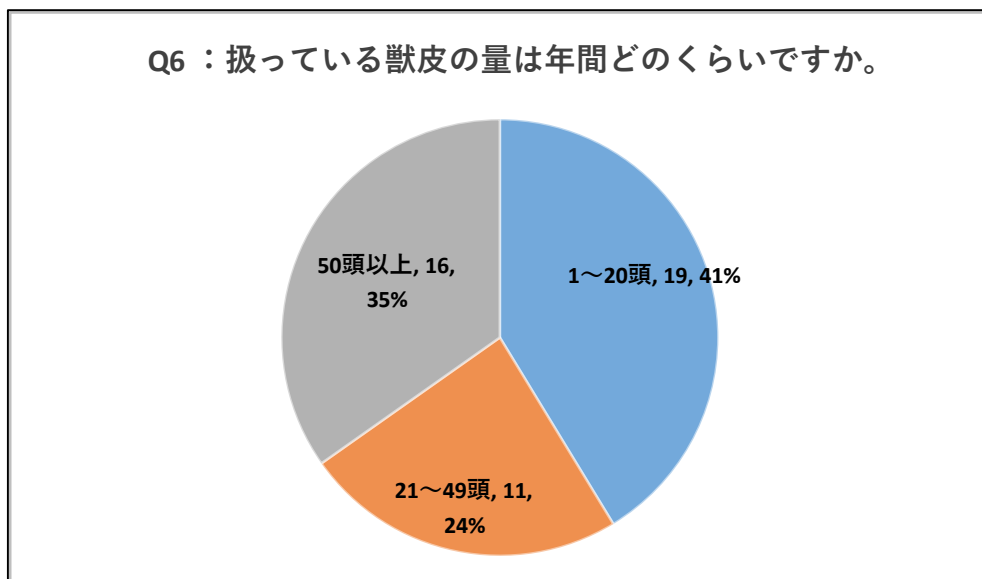
扱っている獣皮の種類については、鹿が最も多く、猪は鹿の7割にとどまった。その他の内訳はクマ (5件)、家畜 (4件、豚・牛・ヤギ)、タヌキ (1件)、キツネ (1件)、外来種 (2件、ヌートリア、アライグマ) となっていた。このうち、クマを扱っている場合は、鹿も扱っていた。家畜の皮を扱っている4組織は、すべて酪農業を営んでいた。



(4) 獣皮の取扱量 (Q6、n=46)

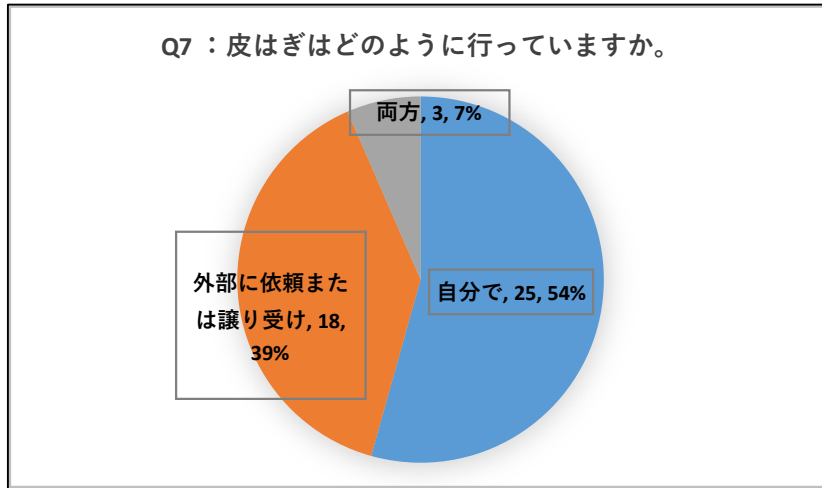
扱っている獣皮の総量については、1年間で1~20頭を扱う組織がもっとも多くなっている (19組織) が、21~49頭、50頭以上を扱う組織も少なくない (それぞれ11組織、16組織)。

獣皮の種類別の取扱量は不明だが、おおよその傾向はQ5とのクロス集計により以下のことがわかる。1~20頭の扱いしかない19組織のうち13組織が鹿を扱っており、同じく21~49頭を扱う11組織のうち6組織、50頭以上を扱う15組織のうち12組織が鹿を扱っている。このように鹿は取扱量の多少に関わりなく扱いがあることがわかる。一方、猪の場合は、1~20頭を扱う18組織中9組織、21~49頭を扱う11組織中7組織、50頭以上を扱う15組織中5組織が猪を扱っている。猪については、鹿に比べて扱う量が少ない傾向があることがわかる。



(5) 皮はぎの方法 (Q7、n=46)

皮はぎは自分で行うのが 25 組織 (54%)、外部に依頼またははいだ皮を譲り受ける場合は 18 組織 (39%) と、自分で行う場合は若干多くなっていた。自分で行う場合の依頼先または譲り受け先は、猟師、食肉処理業者、自治体が挙げられていた。



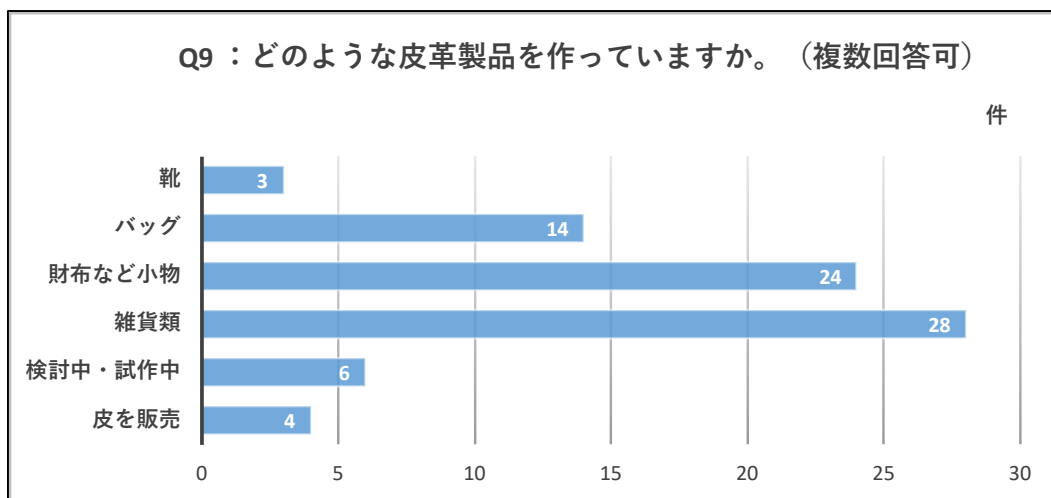
(6) 今後の取扱量 (Q8)

取扱量を増やす予定はあるかどうかについて、原皮の扱いがある 7 組織中、革製品も扱っている 3 組織については、Q8 の回答が、原皮の取り扱いについての回答であるのか、革製品の取り扱いについての回答であるのかが不明であることから、分析の対象外とした。

そこで、原皮の扱いがある 4 組織についてみると、このうち 3 組織 (75.0%) が原皮の扱いを増やす予定であると回答した。一方、革製品を扱っている 39 組織については、取扱量を増やす予定であるのはそのうちの 22 組織 (56.4%) にとどまった。

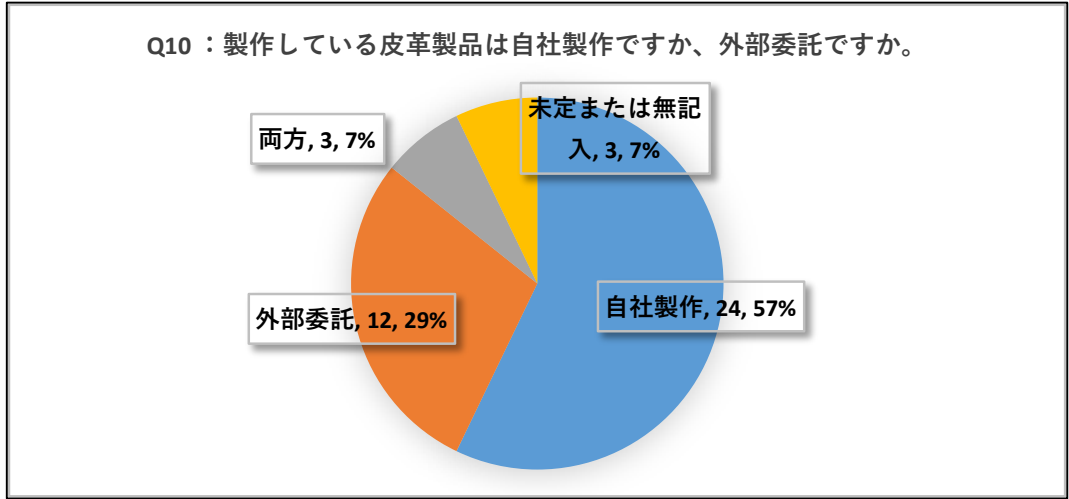
(7) 皮革製品の種類 (Q9、n=46、複数回答)

製作している皮革製品は、靴、バッグ、財布といった、よくみられる皮革製品以外に、iPad ケース、アクセサリ、帽子、椅子の革、小物類や肌の手入れ用など、様々な製品がつくられていた。



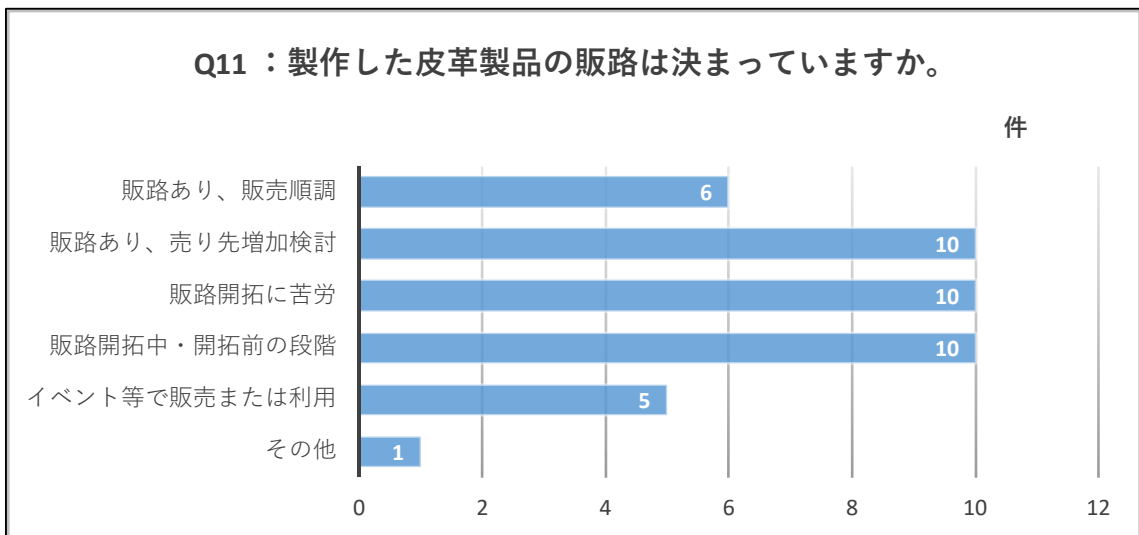
(8) 製作の主体 (Q10、n=42)

皮革製品を扱わず、原皮のみを販売している4組織を除いた42組織について、製作している皮革製品が自社製作であるかどうかについてみると、自社製作が半数を超えており、外部委託は29%にとどまった。



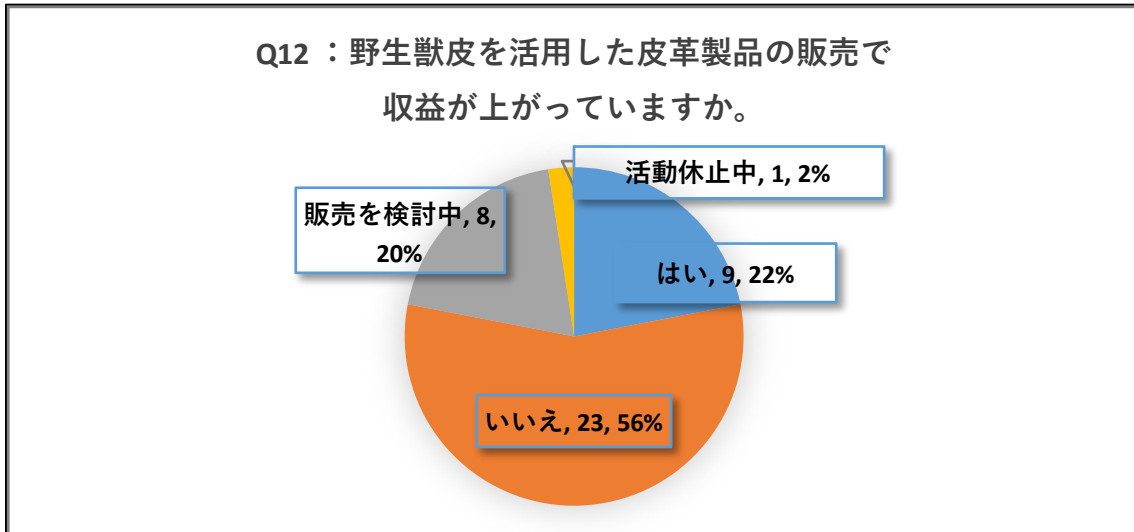
(9) 皮革製品の販路 (Q11、n=42)

皮革製品を扱わず、原皮のみを販売している4組織を除いた42組織について、皮革製品の販路が決まっているかどうかについてたずねたところ、販路があり、販売が順調または、販売増加を検討しているのは、16件(38.1%)、販路開拓に苦労しているのは10件(23.8%)、イベント等で扱っていることが目的である場合は5件(11.9%)、現在、販路開拓中またはその前段階にあるのは10件(23.8%)となっていた。販路開拓に苦労している割合は他の項目に比べて高くはないが、一定割合が苦戦している。



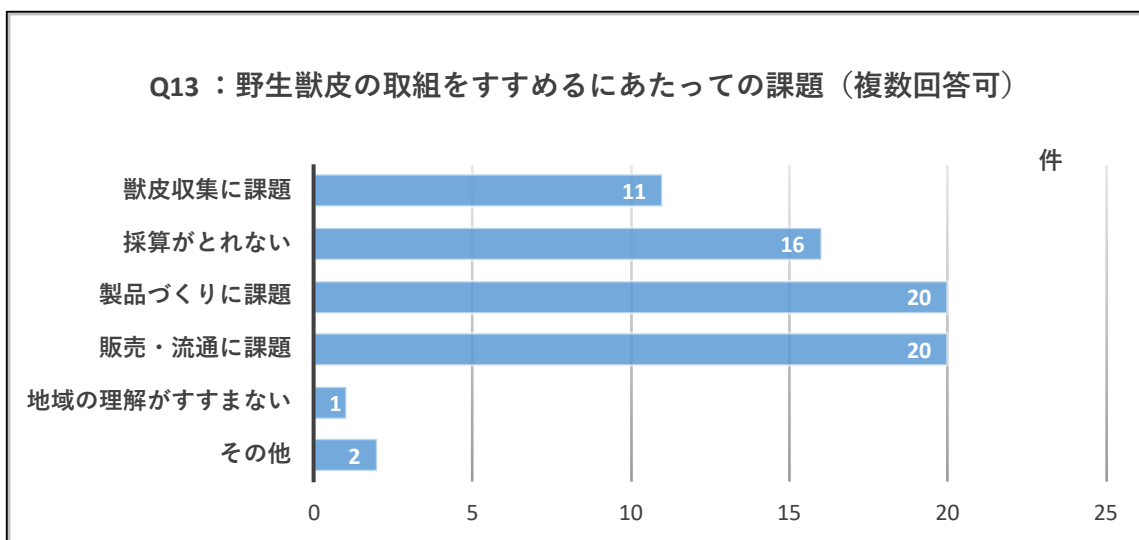
(10) 皮革製品の販売状況 (Q12、n=42)

皮革製品を扱わず、原皮のみを販売している4組織を除いた42組織について、野生獣皮を活用した皮革製品の販売で収益が上がっているかどうかたずねたところ、上がっていると答えた組織(22%)に対し、上がっていないと答えた組織(56%)が倍以上占めていることがわかった。



(11) 野生獣皮活用の取組を進めるにあたっての課題 (Q13、n=39、複数回答)

野生獣皮の活用の取組をすすめるにあたって課題があると回答した39組織について、その内容を見ると、獣皮収集(11件)、皮革製品づくり(20件)、販売・流通(20件)のいずれの段階でも課題が一定程度みられ、なかでも製品づくりと販売・流通の段階での課題が多くなっていた。



野生獣皮の収集段階での課題としては、自治体や猟友会(ハンター)との協力関係がとれていないこと、獣皮の保管スペースがとれないことなどの具体的記述があった。

製品づくりの段階での課題としては、皮はぎや下処理の際の耳や手足、脂をうまく除去することに困難を感じていること、近くになめし業者がないこと(そのため送料の負担が大き)、なめしコストや流通コストの上昇への対応、求めている革の色の選択肢がないこと、などの具体的記述が

みられた。

採算がとれないという回答に関する具体的記述では、獣皮採取から革製品の販売に至るまで地域のボランティアの活動として行われているという回答もみられた。

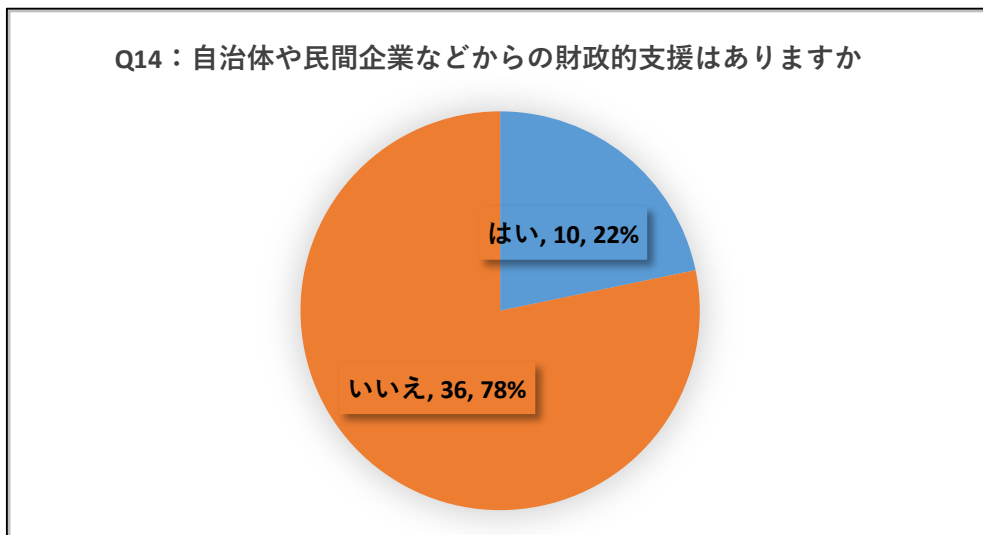
地域の理解がすすまないという回答は他の項目に比べて低くなっていた。

なお、その他の回答としては、社会全体の認知の低さへの指摘、および、原発事故に係る出荷規制により食肉利用が進まないことに伴い、皮の利用もすすまないという、東北地方で深刻となっている問題への指摘があった。

#### (12) 財政的支援の有無 (Q14、n=46)

自治体や民間企業からの財政的支援の有無について、皮のみを取り扱っている組織、皮革製品を取り扱っている組織を合わせた46組織の回答をみると、支援がないとの回答が78%を占めた。

支援があると回答した10組織の内訳をみると、回答者が自治体である1自治体を除き、9組織が民間ではなく行政から支援を受けていた。その行政からの支援に関して、支援目的が書かれてある8件の内訳は、地域振興に関わる皮の有効活用に対する支援(7件)、害獣対策としての支援(1件)となっていた。



#### (13) 野生獣皮の有効活用に必要な支援 (Q15、n=46、自由記述)

野生獣皮の有効活用をさらに促進するために、産地にとって必要な支援や取り組みについてたずねたところ、その回答は下記のようにまとめられた。

狩猟、皮はぎ・皮保管、皮なめし、革製品販売のいずれの段階においても支援の必要性がみられたが、なかでも、皮はぎ・皮の保管に困難が伴っており、この段階での技術支援、施設建設費の助成が必要との回答が多かった。また、食肉加工施設の副産物として出る皮の有効利用が必要として、食肉加工事業への支援を求める意見もみられた。

地消制度については、Q14で皮の有効活用に対する支援を受けていない組織から、その必要性の声があがっている。さらに、ハンター、皮を取り扱う組織・人、自治体、革製品を扱う組織・人、その他関連する組織をつなげる人や場に対する要望が多く挙げられた。

分類	回答
狩猟	ハンター育成に関わる支援
皮はぎや皮の保管に関する技術・施設	良い皮をとるための解体技術の習得／皮はぎ作業の省力化／皮をきれいにはぐ人員に対する補助金／イノシシの脂を簡単に除去する機械／安全に衛生的に解体できる作業場／（共同で利用できる）塩漬け出来る施設や、皮を保管して置く大型冷凍庫の購入のための補助金／皮の保管法に関する技術指導
食肉加工	食肉加工において皮加工まで出来る一貫した施設など、食肉加工施設の必要性または運営支援（2）
皮なめし	依頼する皮の枚数が多い場合に皮なめし料の単価を安くする
革製品の販売	革製品の販売所／革製品の販路拡大のための補助や支援（2）／販売先の確保／獣革を取り扱う業者を増やす取組
マッチング	技術支援先やビジネスパートナーと繋げてくれる取り組み（2）／様々なパターンでの鞣しを気軽に相談できる場／ビジネスや普及、福祉、観光など様々な分野との協働を実現する仕組みづくり／皮の買い取り先を見つけたい／皮を取り扱う人・自治体・猟友会を結びつける人／獣害防除のための調査や捕獲を考えている個人や団体に、野生動物の生息調査等を行っている NPO を紹介する場
地消の制度	皮剥ぎに補助金を出し、革になったものを市民が製品化し、それを市が買い取る制度／猟師との連携を密にして、地消できる仕組みづくりとそのための補助金(2)
規制緩和	野生鳥獣からの放射性物質に関わる出荷規制解除
全体	安定供給体制に関わる総合的な支援
皮の有効活用への理解・協力	自治体（2）／一般市民（2）／猟友会（ハンター）
その他	展示会参加費・交通費や年会費など補助

要望以外の記述としては、皮の有効活用に関わる全国的な取り組みについてそれら3つの取り組みの違いがわかりづらいといった意見や、MATAGI プロジェクトへの肯定的意見がみられた。このほか、皮の地消がうまくいっている状況や、皮の有効活用をはじめた経緯についての詳細を記述している回答もあった。

### 3. 集計結果：使い手アンケート

#### （1）回答者の所在地（Q2、n=9）

組織の所在地は全国各地にわたっている。

#### （2）回答者の属性（Q3、n=9）

回答者のうち、革製品などの製造業を営んでいるのは7件、残りの2件は教員、NPO 職員であった。



(3) 野生獣革を活用した製品の製作・販売の有無 (Q4、n=9)

野生獣革を使った製品を現在、製作・販売している組織・人は9件中7件となっていた。

(4) 製品の種類 (Q5、n=8、複数回答)

野生獣革を現在、または過去に製作・販売している、していた8組織・人が扱っていた商品は、多い順に、財布などの小物6件、雑貨4件、バッグ2件、くつ1件となっていた。

(5) 野生獣革の魅力 (Q6、n=8、複数回答)

野生獣革を現在、または過去に製作・販売している、していた8組織・人に対して、野生獣革の魅力についてたずねたところ、ストーリー性8件、風合い6件、デザイン性1件が挙げられており、ストーリー性についてはすべての組織・人が認めていた。

(6) 野生獣革製品の取り扱いを止めた理由 (Q7、n=2、複数回答)

野生獣革を過去に製作・販売していた、または製作・販売したことがないと回答した2組織・人に対して、使用をやめた、または使用に踏み切れない理由をたずねたところ、価格の問題、そして野生獣革の販売先を知らないことが挙げられていた。

(7) 野生獣革の活用と皮革産業の活性化 (Q8、n=9)

皮革業界の活性化のために野生獣革の活用も役に立つかどうかの問いには、すべての組織・人が役に立つと回答していた。

(8) 野生獣革活用の活性化に必要なこと (Q9、n=9、複数回答)

どのようにすれば野生獣革の活用が活性化されるかどうかたずねたところ、「獣革の購入先がはっきりしている」6件、「獣革の価格が安定している」6件、「獣革の品質が安定している」5件、「獣革が安定して供給される」1件となっていた。

(9) 野生獣革活用の促進のための使い手への支援策 (Q10、n=9、自由記述)

野生獣革の活用を促進するために、使い手にとってどのような支援や取り組みが必要か、たずねたところ、以下のような意見がみられた。

商品開発・販売の成功には素材のもつストーリー性に注目することが重要であるとの意見(5件)が多かった。そのほかの意見としては、獣皮有効活用の成功事例や獣皮活用法についての勉強会・研修の開催(3件)、マッチング/ネットワーク構築(仕留めた獣から皮加工のあいだ。産地と使い手のあいだ)(3件)、皮革の展示会での野生獣革の出展などによる消費者への宣伝(2件)、自治体の理解・支援の必要性(2件)、高品質の野生獣革の供給(1件)、などがみられた。

#### 4. 参考：アンケート調査項目

##### <産地向け>

Q1：組織等の名称：(個人の場合はなしとする)	
Q2：組織等の主な業務内容(個人の場合は職業)	
Q3：組織等の主な活動地(都道府県・市町村まで)	
Q4：組織等の規模(関わっている人または団体の数)	
Q5：どのような獣皮を扱っていますか。(複数回答可)	
a. 鹿    b. 猪    3. その他(具体的内容：)	)
Q6：その量は年間でどのぐらいですか。	
a.1～20頭    b.21頭～49頭    c.50頭以上	
Q7：皮はぎはどのようにして行っていますか。	
a.自分で    b.外部委託    c.その他(具体的内容：)	)
Q8：今後、取り扱い量を増やす予定はありますか。	
a.はい    b.いいえ	
Q9：どのような皮革製品を作っていますか。(複数回答可)	
a.くつ    b.バッグ    c.財布など小物    d.雑貨類    e.その他(具体的内容：)	)
Q10：それは自社製作ですか、外部委託ですか。	
a.自主製作、b.外部委託、c.その他(具体的内容：)	)
Q11：その販路は決まっていますか。	
a.決まった販路があり、順調に販売されている	
b.決まった販路があるが、さらに売り先を増やしたいと考えている	
c.決まった販路がなく、探すのに苦労している	
d.その他(具体的内容：)	)
Q12：野生獣皮を活用した皮革製品の販売で収益が上がっていますか。	
a.はい、b.いいえ	
Q13：野生獣皮の取り組みを進めるにあたっての課題を教えてください。(複数回答可)	
a.野生獣皮の収集に課題がある	
b.採算がとれない	
c.製品づくりに課題がある	
d.販売・流通させるのに課題がある	
e.地域での理解が進まない	
f.その他(具体的内容：)	)
Q14：自治体や民間企業などからの財政的支援はありますか。	
a.はい(具体的内容：)    b.いいえ	)
Q15：野生獣皮の有効活用をさらに促進するために、産地にとってどのような支援や取り組みが必要でしょうか。自由にご意見をお書きください。(自由記述)	

##### <使い手向け>

Q1：組織等の名称：(個人の場合はなしとする)	
Q2：組織等の住所：	
Q3：組織等の主な業務内容(個人の場合は職業)：	
Q4：野生獣革を使った製品を現在、製作・販売していますか。	
a.はい    b.いいえ    c.以前製作・販売していたが、現在は行っていない	
Q5：それはどのような商品ですか。(Q1でaまたはcと回答した方)(複数回答可)	

a.くつ b.バッグ c.財布など小物 d.雑貨類 その他（具体的内容： ）

Q6：野生獣革の魅力は何ですか。（Q1 で a または c と回答した方）（複数回答可）

a.風合い b.ストーリー性 c.デザイン性 d.その他（具体的内容： ）

Q7：野生獣革の使用をやめた、または使用に踏み切れない理由は何ですか。（Q1 で b または c と回答した方に）（複数回答可）

a.価格 b.品質 c.安定供給 d.その他（具体的内容： ）

Q8：皮革業界の活性化のために野生獣革の活用も役に立つと思いますか？

a.はい、b.いいえ

Q9：どのようにすれば野生獣革の活用が活性化されると思いますか。（複数回答可）

a. 獣革の購入先がはっきりしている

b. 獣革の価格が安定している

c. 獣革の品質が安定している

d. その他（具体的内容： ）

Q10：野生獣革の活用を促進するために、使い手にとってどのような支援や取り組みが必要でしょうか。自由にご意見をお書きください。（自由記述）

以上